

水牛通信

「可不可」プログラム

編集

鎌田慧

野心家カフカ 池内紀 2	水牛ふたっつ 斉藤晴彦 16
カフカ／可不可 高橋悠治 4	ジョン・ゾーン・ゾーン 玖保キリコ 18
「可不可は一定」 津野海太郎 6	最近の…… 西沢幸彦 20
スケッチ 平野甲賀 8	宅配の美味 卷上公一 22
舞台監督可？不可？ 田川律 10	私の公的生活 三宅榛名 24
どこから「可不可」 八巻美恵 12	逆光線旅日記 村松克己 26
来年の広告 平野公子 13	おなかの中の物語 柳沢三千代 28
時々自動 朝比奈尚行 14	もやしのヒゲ 吉原すみれ 31

野心家カフカ 池内紀

カフカにはさまざまな誤解がある。たとえば、カフカは難解という誤解。むずかしくてよくわからない、という誤解。この誤解をただすのはむずかしい。というのはカフカはとてもやさしいからだ。前代未聞といたいほどやさしく、これ以上ないほどわかりよい。しかし、これを言うのには私はもつともふさわしくない人間である。いくら力説しても納得してもらえないだろう。というのは自分は一応、ドイツ文学者

のも、むしろ読まれない方がよかった。なんと謙虚な人だろう。自作に対してもそうだし、周りの人間に対しても謙虚だった。友人や知人や恋人たちがいろいろなカフカ像を伝えているが、一点でござって共通している。この人物が並外れて謙虚だったということ。ためにG・ヤノーホの「カフカとの対話」を開いてみるといい。上司や年長者はもとより生意気ざかりの青年にも、いかにカフカが謙虚であったか。このようにして無名者カフカの伝説が生まれたわけだろう。名声などこれっぽちも願わず、孤独に書いて、ひっそりと死んだ。死後何十年かのちのカフカ・ブームと、それにつづく世界的な名声に誰よりも驚いているのはカフカ自身だという誤解。どこにそんなカフカがいるだろう？ 作品や日記や手紙を通してうかがえる

ということになっている。つまりは専門家、だからこそ、そんなことが言えるのだ、普通の読者には、やはりカフカはむずかしい——そう言われるのが関の山。この誤解をとくのはやめておこう。だが、言いっぱなしで話をそらすのは卑怯である。一つだけつけ加えておくとして、ために誰か漫画家が一字一句、文字を追うようにしてそっくりカフカを絵に移したら、どんなに面白い作品ができあがることだろう。短篇でも長篇でもかまわない。最初の「コマ」から最後の「コマ」まで、「原作」がいかに前代未聞の明快さで書かれているか、よくわかるはずである。

もう一つ別の誤解、無名者カフカという誤解。しがない勤め人としての日常に苦しみながら、家にもどってから一人せつせと書いていたカフカ。生前はさっぱり認められなかった作家であって、つつましく生き、孤独に書いて、

のは、あふれるような野心をたぎらせ、屋敷をわかつた書いているカフカである。書くためには結婚をすてた。書くためには家庭をあきらめた。律儀に職務にいそしんだのは、そのほかのすべてにおいて好むところの方法で書きたかったせいである。彼は何年にもわたる婚約者に何百回となく、書くことの必要を訴えた。これは一つ屋根の下の父親宛に、おそろしく長文の手紙を書いた人物である。公刊のあてが少しもないのに、何千枚に及ぶ小説を整然と書いていた。

私は思うのだが誰がみても並外れて謙虚な人が、そんなに謙虚であるはずがない。カフカは自分の作品の意味を信じていた。いづれ自分の時代がくると、かたく心に期していた。無邪気なマールラーはそんな意味のことを大っぴらに口にしたが、(謙虚な)カフカは、それを秘めて語らなかつた。各人おの

無名者として死んだカフカ(という誤解)。

それが誤解かどうか。たしかにカフカは、おおかた無名のうちに終始した。労働者災害保険局という、あまりさえない所に就職して以来、年金がつくギリギリの年まで勤務して、勤務の味けなさをこぼしながら結構有能なサラリーマンで、順調に地位を昇って退職前はそれなりの管理職についていた。家にもどり、ひとりせつせと小説を書いたが、あまり認められなかつた。その点、当人もわかつていたようである。のちに薄っぺらな短篇集を出してくれた出版者との初めての出会いの時、彼はこう言ったものだ。「あなたがこれを出版してくださるよりも、突き返してくださる方がうれしいですよ」。死の床で友人に言いのことした遺言は有名である。草稿や断片一切、すべて焼き棄てるように、すでに刊行したも

おの気質の違いというものである。

死の床で自作の焼却を依頼したのは、どれも意に満たなかつたからである。さんざん苦勞したというのに、願ったところに達しなかつた成果を前にして「悪夢を書きちらしただけ」などと言った。あれほどの仕事を仕上げたおきながら、こんな言い廻しをするなんて、なんと強烈な作品意識を伝えていることだろう！ たえず自作に対して厳しく「可・不可」を問いつづけていた男が死を前にして邪険にも「不可」の判を捺したまでである。

カフカの最も初期の作は「ある戦いの記録」と題されている。文中どこにも戦いらしいものは記されていないというのに。しかしやはり(ある戦い)の記録というものだ。その作品には至るところに、大いなる名声を夢みて果敢に挑みかかった野心家の発明が見つかるにちがいない。

カフカ／ 可不可 高橋悠治

「可不可」というしばいを長谷川四郎さんが書いている、と平野甲賀が言うので、晶文社の「長谷川四郎全集」を借りてみたら、それは「審判」という題だった。「非攻」とまぢがえたのだからうか。ともかく、この題をつけることで長谷川さんの追憶とする。

このしばいのステージは、カフカのノートブックであり、俳優たちはカフカのペンとなつてうごく。

カフカが書くことを祈りのひとつの私たちにとらえたように、ステージでうごき、しゃべり、音楽を演奏するのも

祈りであるべきで、そこでは意味を解釈したり、表現したりはしないのだ。それぞれがひとりきりで闇とむかいあっている人間の集団のつくりだす、いりくんだリズムがある。

すべての場面、すべてのことがカフカからとられている。それも、ノートのなかの未完の断片をつなぎあわせたもの、あるものは、いくつかのちがう断片から合成されている。本として出版されたどの小説にもまして、カフカはノートと日記とてがみを書きつづけるという行為そのものと化した人間だった。それは未完の行為であり、可能と不可能のあいだでゆれうごくゆえに、闇にむかってさしだされた祈りの手であることができる。

解釈となつて一般化され、抽象化される意味ではなく、むしろ意味をもつことをせず、意味そのものであるような行為を発見すること。そのようなもの

がもしあるとすれば、それによってカフカをおきかえることも可能かもしれない。とりあえず、原文のリズムにもとずいた日本語を考えてみる。

このリズムから音楽もでてくるはずだが、それは楽譜に書いてしまつてはいけないリズム、構造化できないリズムなので、問題は、それを定義なしで演奏のときに自発的にあらわれるようなしかけをどのようにつくるか、だ。充分に準備されながら、いざとなると制御をすりぬけるたよりのない声によってのみ、ネズミのプリマドンナ、ヨセフイーネは民衆の歌い手である。

以下に出典を示す。ページは新潮社版カフカ全集のものだが、訳文はつかっていない。

「はじめの歌」(「観衆」より「インディアンになりたい願ひ」、1巻29頁)

「判決」の最終場面(1巻44頁)
片手で夢を追ひ払うしぐさ(「舵手」2巻96頁)

「日記」一九二二年九月二三日

「変身」の掃除ばあさん(1巻82頁)

「第二の歌」(「罪、苦惱、希望、真実の道についての考察」からアフォリズム一五と二六、3巻30頁)

「変身」からグレゴールの死体(1巻90頁)

「第三の歌」(「断片」、3巻288頁)

風の音(「断片」、3巻179頁)

「第四の歌」(「断片」、3巻180頁)

ドアがひらく(「断片」、3巻178頁)

飛んできた棒(「日記」一九一三年五月三日)

「おれは、いったいだれだっけ」(「日記」一九一三年一〇月二六日)

降霊術(「断片」、3巻179頁)
ホタンを引きちぎる(「日記」一九一三年一〇月二六日)

「第五の歌」(「八つ折り判ノート、第五冊」、3巻102頁)

夜明けの訪問者(「日記」一九一四年三月九日)

つづき(「日記」一九一三年一月二四日)

なぐりあい(「日記」一九一四年五月二七日)

ペーターと狼(「断片」、3巻182頁)

「第六の歌」(「断片」、3巻205頁)

まがった手(「日記」一九一四年八月三日)

二つの手の闘い(「八つ折りノート、第二冊」、3巻52頁)

パン(「断片」、3巻282頁)
「第七の歌」(「日記」一九一六年六

月一九日、後半は「第二の歌」とおなじ)

死んだ少女(「断片」、3巻196頁)

しずかだ(「日記」一九二二年一月二〇日)

「恋人たち、天使たち」(「日記」一九一六年七月一九日)

死刑執行人(「日記」一九一六年七月二二日)

助けはこない(「獵師グラフス」、2巻85頁)

質問の無意味(「日記」一九一五年九月二八日)

「変身」からグレーテのヴァイオリン(1巻84頁)

一言でいい(「断片」、3巻246頁)
ぼくのおこがれは昔(「断片」、3巻252頁)

「断食芸人」(1巻176頁)

「最後の歌」(「断片」、3巻183頁)

「可不可は一定」

津野海太郎

高橋悠治の「可不可」は、かれが肝臓をわるくして入院していた病院のベッドから生まれた。

そのことと、かれが「可不可」を上演する部屋のまんなかにもベッドをおくように指定したこととのあいだには、なにか関係があるのだろうか。あるといてもないといってもいいのだが、せっかくだから関係ありと考えておくことにしよう。

すべての人工照明をとりさった病院

のくらやみに、やがて死ぬであろう病人のベッドが、まるで虫籠みたいに、そこだけぼんやりとあかるく吊るさされている。

どこからさしてくる光なのだろう？ ひとが生き死にする事実の世界の外側からか？ あると思えばない、ないと思えばあるような——とすれば、この光は私の眼の錯覚にすぎないのか？ 可か、それとも不可か？ というふう

に、高橋悠治の横たわる病院ベッドが築地本願寺の講堂に横すべりしていくんだな、と私は台本を読んでもず感じた。（かれが病院で死にかけたという事実はない。ねんのため）

退院のち、草月ホールの「夜の時間」コンサートで、高橋悠治は「可不可」ではない「カフカ」を初演した。演奏にはいるまえにボソボソとしゃべったことばが、いまでも印象にのこって

いる。

「ええっと、きょうはソロのピアノ・コンサートなわけだけど、ソロというのもピアノというのもコンサートというのも、なんか違和感があるんですね。ここで一人でじっと見られているというのはいやなんで、できれば自分の部屋で勝手に弾いているのを、そばで見てもらってるといふふうにしたたい」

夜の時間のやみの中に、かれの部屋だけがぼんやりとあかるい虫籠みたいに揺れている。

では、「そばで見ている」という私たちはどこにいるのか？

かれとおなじ虫籠の中にか？

それとも虫籠の外からのぞきこんでいるのか？

マッチ売りの少女みたいにか？

そのどちらでもあってどちらでもないというようにコンサートは進行した。そう私は記憶している。いい時間だっ

た。ステージが、やがてオーディトリウムの全体が小さな部屋になった。

十数か月がたって、こんどは「カフカ」ではない「可不可」——

もしも私が俳優だったとしたら、やっぱり自分の部屋で一人でしごとをしている人間のように、ということばかり、たくさん観客に見つめられてステージにいる人間のようにではなく演じたいと思うだろう。でも、これは至難のわざだ。

高橋悠治のステージはたしかに一つのモデルになる。

しかし、そのモデルをしつかり頭にたたきこんだとして、実際にはどうやればいいのか？ 台本は楽譜ではないし、演技は演奏ではない。台本を楽譜のようにあつかい、演奏するように演技するためには、なんらかの規則や仕掛けがある。だが規則や仕掛けが

めだっってしまったえば、自分の部屋に一人であるようにステージにいることはできない。モデルは遠すぎてよく見えないくらい遠くにいる。

おびただしい俳優たちのなかで、あたかも街路を歩くように舞台上立つことができよう少数の俳優たちの何人かが、ここにあつまってくれた。力をあわせて、いままで見えなかったなにかが少しでも見えたという状態をつくってみたい。

カフカには苦悩する能力や資質が充分にあった。と同時に、その充分すぎるほどの苦悩によってみだされたいスタイルをつくることもできた。高橋悠治の「可不可」はそのカフカよりもあかるい。ようするにスタイル的にあかるい。

かれの台本は戯曲のかたちでは書かれていない。それをオーソドックスな

戯曲のかたちに書きなおしてみた。

ひとかたまりの文章をト書きと台詞とにわけろ。ト書きと台詞のあいだを一行あける。台詞のあたまには発言者の名前をのせる。そうすると、いっそうあかるくなった。ことばはおなじなのに、かたちを変えただけで、むずかしい台本がやさしくなった。びっくりした。かたちには力がある。だから、やさしいものに裂け目を入れて、わざとむずかしくすることもできる。

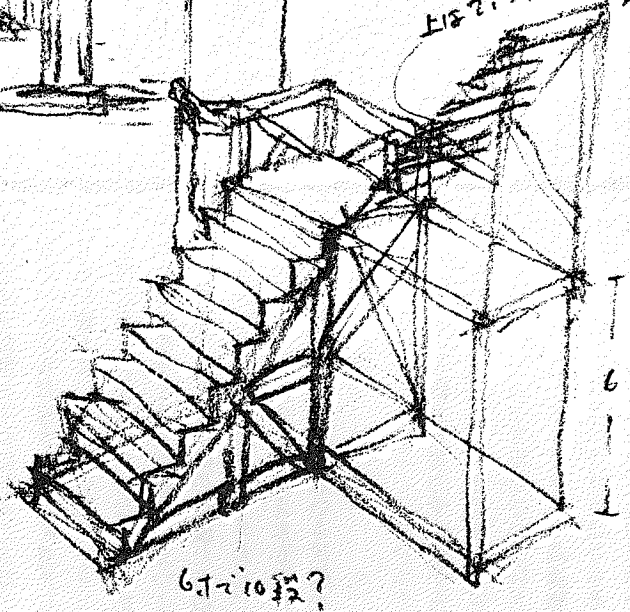
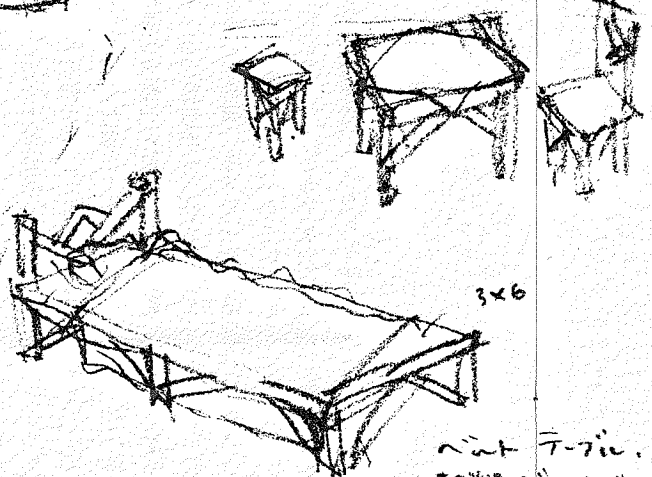
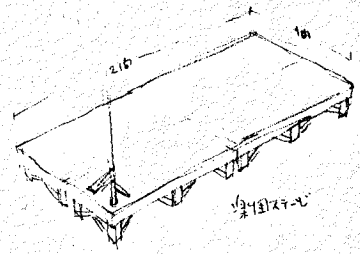
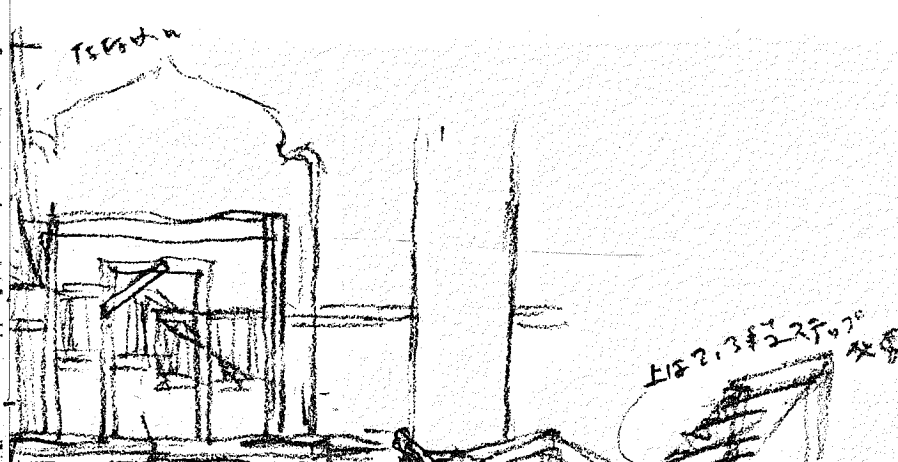
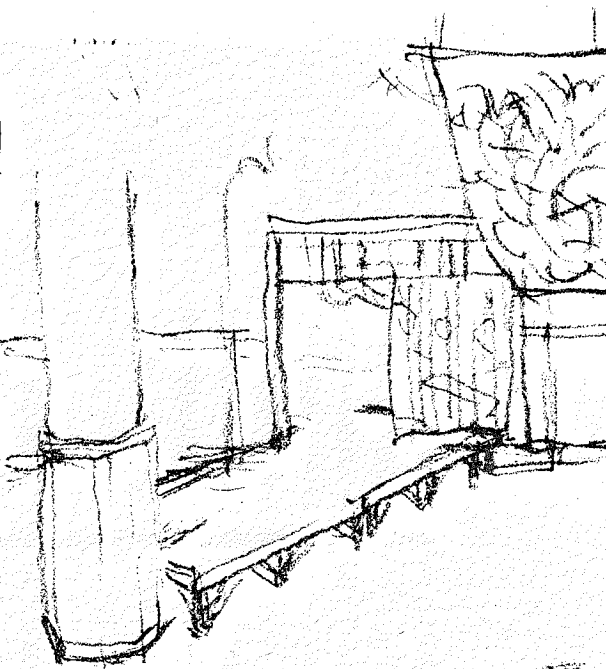
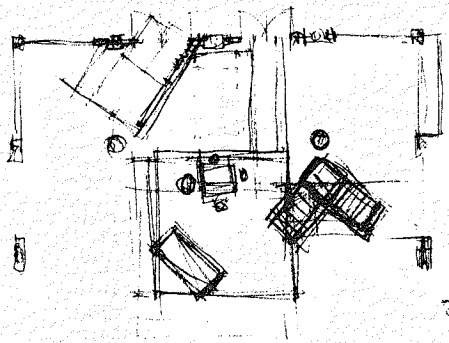
高橋悠治はカフカの作品を断片にきりきざんだ。断片と断片とのあいだにおかれた空白はあかるい。

それを戯曲のかたちに書きなおすと、さらに空白がふえる。読んだり演じたりするものは意味を解読するかわりに、その空白の中でみずから動くことができる。だから、やさしい。あかるいからくらい。やさしいからむずかしい。そういうのがいい。

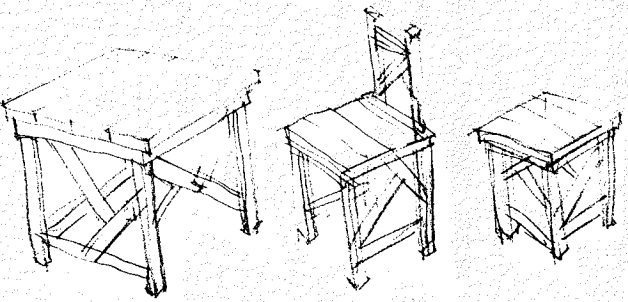
スケッチ

(オペラ可不可のためのラフスケッチ)

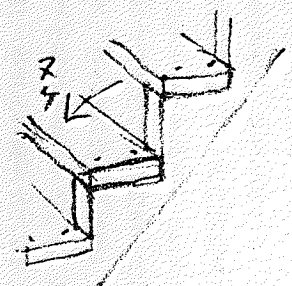
平野甲賀



6m-10段?



ベント テーブル 階段
材料 30x40
木製 経年作り
白黒 色



5/160



舞台監督可？ 不可？ 田川律

「お前、金になれへん舞台監督やたらやるのか」

かつての仲間のひとりはいこういっていじめる。「スつに、そうきめたわけやないけど」と、ぼくの返事は歯切れが悪い。そもそも、ぼくがこの仕事をしようになったのは、大阪の労音という鑑賞団体に入ったからだ。

敵密には、それより二年前に、大阪の新歌舞伎座で、雪村いづみのショーの舞台監督をやらされたのだが、ホ

ントに「なんもしらん」ので、舞台のあたりをうろろしていただけだ。

労音にも、舞台監督になるつもりで入ったのではなく制作の仕事をするために入った。自分がやっていることが舞台監督だと知ったのは、ずっとあともう労音を止めて、雑誌の編集の仕事も止めて、なにをして食べていこうかと考えている時、冒頭の辛辣な言葉を吐いた友人に勧められて「そやったのかあれが舞台監督というものか」とわかったくらいだ。

それからでも十七年は経った。制作の頃、バレエの舞台監督にもう白髪の人が出て「こんな仕事、トシとってやんので大変やろな」と思っていたのにいつの間にか、自分がそういうトシになってしまった。いざ、そうやってみると、べつだん感激もない。いつもとおんなし（同じ）や。たしかに体力はなくなってきたけどな。

舞台監督、というのは「マジ」の要素を必要とされる。誰よりも先に小屋

(劇場)へ行って、何も無い舞台に、次々と音響や照明や道具が組み立てられるのを見て、出演者を迎えて、ゲネプロと呼ばれる通し稽古をして、本番を見守って、後片づけをして、最後に小屋から帰るからかもしれないし、演出家がいる舞台だと、演出家のいうとおりにならんか。

監督というより、交通整理、の性格のほうが強い。英語では「ステージ・ディレクター」ではなく「ステージ・マネージャー」という。こっちのほう、この仕事の内容をよくあらわしている。だから、日本語の「監督」に騙されて、監督をしようとしてはならないのだ。つい勘違いしてまう人もけっこういるけど。労音にいた時は、制作と舞台監督を兼任してたからやっちゃったかもしれない。

そんな舞台監督のせい、この仕事を

をするときまっ「悪夢」に悩まされた。本番が近づくと、きまっ「夢」の中で、うまっいかな本番が出てくるのだ。観客がもう客席にいっぱい入っているのに出演者がまだ来ていない、とか、舞台装置が出来上がっていない、とか、あるいは演出にひどく叱られているとか。

夢が夢でなく、現実を色濃く引きずっているというのを、この時ほど痛感することはない。それもあって、なるべく「ややこしい」舞台の監督は引き受けないようにしてきた。単純な交通整理で済むようなもの、にしていたのだ。ところが、今更ばかりはそうはいかない。「水牛通信」のモットーみたいな「役割分担」からいけば、当然のようにはぼくのところへ「お鉢」がまわってくる。

しかも、あまりやったことのない、

オペラの舞台監督だ。この原稿を書

いている時点では、まだ稽古も始まっていないからプレッシャーはそれほどでもないのだが、それでもすでに来るべき「未来」への恐ろしい予感を感じている。小道具は、衣装は、役者たちの練習スケジュールは、など、どれをとっても「えらいこっちゃ」

なにしろ、労音時代の六年間の経験で、悪い癖がついてしまった。舞台というものは、必ず「期限」がある。何月何日何時に始まる、となれば、それから遅れてもせいぜい三十分の間に「本番」は始まり、そのあと数時間で間違はなく終わる。そこで、ついつい逆算をしてしまう。「あと何時間残っているな」と。その時間は本番が近づくと、どんどん減っていくのだが、馴れてくると「これだけのことをするには何時間あればいい」という「ずるさ」が生まれてきて、ついズボラにな

ってしまう。

もっとも、それは、自発的にやらない時に多い。今回のように、ぼくにとっては「ゴールデン・コンビ」と思えるようなスタッフ・キャストで仕事する場合、当てはまらない。

ホンマは、そんなに緊張しないで、軽くやればいいのかもしれないが、性分とでもいうのかな。

そういえば、つい昨日も、変な夢を見た。おおよそ、このオペラとは無関係だけど、不思議な映画のロケの夢で、そこではぼくは「監督」でなく出演者なのだ。悪役を相手にするいい役なのだが、悪役のほうが圧倒的に強くて、台本はどうなっているのかしらないが、いっかな悪役が負けてくれない。

とうとう最後はいつものように「これは夢なのだ」と思い込んで目が覚めた。やっぱり早くもプレッシャーがかかっているのか。

どこから 「可不可」 八巻美恵

「可不可」をやって水牛を終刊にしようと思ったのは、去年のちょうど今ごろだった。ある日、平野さんちで深夜まで「会議」にふけた。お酒をガンガン飲んでた人はいたけれど、何を話したか忘れた、と翌日になっていう人はいなかった。

一年後、おなじ顔ぶれが、本願寺講堂にあつまって、本格的にステージの場所をきめたり、測定したりしている。この「可不可」をスタッフはそれぞれ

のやりかたで長谷川四郎さんをおもってつくっている。話し合っ確認したわけではないけれど、それはわかる。一年前に、やるうよ、と決めたとき長谷川四郎さんはもう何年目の病床にあった。そして今年四月に亡くなって、いまはもういない。

津野さんは右膝を痛めている。膝が曲がらないので、真白なズボンがなんだか痛々しくみえる。痛々しいどころか、ほんとに痛いらしい。まるで自分を演出してみたいに、ギクシャクしたあるきかただ。そのまわりを身軽に動いている田川さんは、黒いズボンに赤いクツ、紺の上品な女物のスウェードのコートがいつもの派手なトレーナーを隠している。平野さんはむこうの壁にはりついて、黒いツバつき帽子をうしろまえにかぶりなおし、巻尺で天井までの高さを測っている。その横のピアノのそばで立っている悠治は、な

なめにねじれて、みんなを見ている。「可不可」のせかいがすでにみてとれるような光景だ。

九年間も水牛通信を出しつづけていたのに、こんなふうに、「みんなで」「いっしょに」なにかをするのははじめてだというのも、よくかんがえてみると不思議だ。しかも、ひとたびやることになる、どんなものになるのかはつきりしないうちから、フランツ・カフカなんだからブラハでもやってみたらどうだろう、などと言いつつとがいるような集まりなのだ。

ところで、十年前に「みにくいJASEAN」という芝居で、水牛通信と水牛楽団誕生のきっかけをつくってくれたテプシリ・スークソバさんはいまもチェンマイで元気にしているだろうか。芝居だけでなく、詩を書き、それを朗読もし、小説を書き、絵も描き、カフカとは正反対のようにみえる彼。

来年の広告 平野公子

田園調布にバテ屋の林のり子さんに会いに行く。落ち合ったのは、陶芸家の宮脇昭彦さん、平野甲賀さんと私。

林さんの名や、その仕事の話は、だいぶ前から知ってはいたけど、林さんその人に会ったのは、水牛の例の突然の座談会ででした。2年前のことで、その時食べた林さんのバテはとてもおいしかった。それだけでなく「食べることを仕事にしている人で、初めて「成功しているな」と思えたこと

が、実に愉快なことだったのです。こうなったら、できるだけ大勢の人に食べてもらうしかありません。できれば大がかりな仕方です。(と言っても家庭で集まって会食するという規模ではないというほどのことですが)場所は小池一子さんの佐賀町エキジビットスペースがいいな。器も作ったらどうだろうか、来た人が宮脇さんの器で林さんの料理を食べる。「食・器二人展」といつものクセでせっかちに思い込んでしまう。

一回目の集まりでは、こんなふうになりそうです。

●2日間ぐらい屋から夜まで開く。屋はバテ屋の日常的に作っているバテ類で昼食。器は展示即売します。もちろん持ち帰り用のバテ類もたくさん用意しましょう。夜、出歩けない人達のために開く屋の部。

●バテ類を使った料理のバリエーションを小冊子にまとめる。これは料理編集を仕事にしている尾崎文枝さんが作ってくれることでしょう。

●平野甲賀さんには、グイ呑みを500個焼いてもらいましょう。いろいろな形の、そろってないの、好きなのを手にして(手にしたものは自分のもの)夜は焼酎の飲み放題。

●宮脇さんの器は、白地に絵付けの磁器です。林さんの料理プランと相談しながら、これから製作にはいきます。期待してください。

●夜の食事、これは林さんのプランを待つことにします。「卵ごはんはどうかしら」なんて本人は言っています。

水牛通信はめでたく終刊となりますが、一年後、「食・器二人展」の御案内が届いたら、ああ、あのことね、と思いついてください。

時々自動 朝比奈尚行

元氣いっぱい自己宣伝はとてもできそうにない。ぼくがメンバーになっている時々自動の公演が終わったばかり、山積みの反省材料を前にかなりへビーな心境なのだ。今自己宣伝文を書き始めたら逆効果間違いなし、止めてインタヴューでいくことにした。しかしいまさら編集委員の人にインタ

ヴューして下さいとはいえない。今日がこの原稿の締切日なのだ。で、妻の尾崎文さんにインタヴューをお願いした。

文 では月並ですが略歴から。
ぼく 一九四八年生まれ。現在に至る。特筆すべきものなにもなしってことですか。現在は何してますか。
ぼく 時々自動で作・演出・出演をしています。

文 時々自動って劇団じゃないんですよう。
ぼく そう、劇団権力みたいなのがあるでしょう。それを行使して劇団を維持していくみたい。そういうのいやでさ。で、劇団制じゃない。だけどこれにはなかなか厳しい面もありまして。

文 たとえば？
ぼく たとえばしょっちゅう稽古すっぽかす奴がいたとして、だけどそいつ

に対しては極めて個人的に怒るか嘆くかするしかないわけですか(笑)。

文 どんな人がいるの、時々自動には、ぼく いろんな人。編集者志望の人、映画撮りたい人、自分でも絵を描く絵のモデルさん、オペラ歌手だった人、人材バンクみたいところに登録してる人、俳優で食いたい人とかいろいろ。多い時で十四、五人、少ない時で七、八人くらいかな。劇団じゃないんでメンバーは流動的なわけ。でも基本メンバーみたいなのはなんとなく決まってきたみたい。ま、いまのとこ集団としてはうまく機能してるんじゃないかな。文 ところで今回公演の「ニヤヒヤ」も前回の「生長する」も沈黙劇だったわけだけど、どうして沈黙劇なの。
ぼく うーん、どうしてって聞かれても困るなあ。別に理由なんてないんだもん。沈黙劇をやるうって思いたつてことは、沈黙劇をこんな風にやろう

とか、あんな風にやろうって思いたつことなわけで、何故っていう段階はぶ

っとんじやってるわけ。沈黙劇に限らず何かやろうっていうのは、どんなふうにやろうってことだなぼくの場合。文 わかった。じゃ、どんなふうにやりたかったの沈黙劇を。

ぼく 最初思ってたのはさ、登場人物達が静かに動いてるわけ。歩いたり、止まったり、寝そべったりものすごく単調なわけ、眠たくなっちゃうような感じ。と、突然音楽が始まるの。それはうただったり、インストだったりするんだけど、登場人物達の演奏なわけね。でそれが終わるとまた単調な時間に戻って、またしばらくすると音楽が始まると、このくり返し。それが何時間も続くわけ。

文 わたし完全に寝ちゃうと思うな。ぼく でも突然すげえ激しい音楽が鳴ったりしてすっとび起きちゃう(笑)。

文 だけど「ニヤヒヤ」はそれとは随分違う感じだったわね。

ぼく うん、「ニヤヒヤ」も「生長する」も沈黙と音楽である物語をつくり上げようってことだったからね。はじめのイメージとは全然違っちゃった。まあそれまでの時々自動ってどっちかっていうと物語を壊そう壊そうとしてたのね。お客さんはその壊す手つきみたいなのを楽しんでたんじゃないかって気がする。こちらの目論見としては、壊しっぱなしってのじゃなくて、バラバラになったり、ねじ曲げられたりした物語の断片が、お客さんの頭の中で勝手に組み合わされてもうひとつの別な物語を暗示するってことまで考えてたんだけど、やっぱり破壊の手つきの方が際立ちちゃったんだと思う。

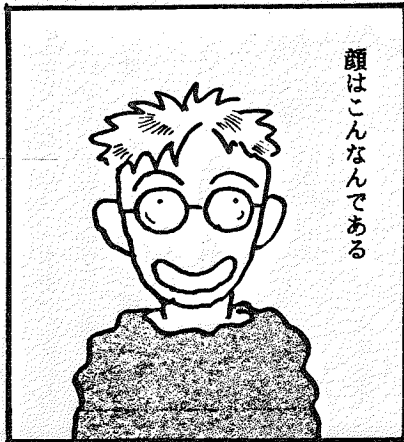
文 で、ここらへんでひとつ物語をきちんとつくり上げてみるかなと……。ぼく うーん、きちんとじゃないなあ。

ことばがないからやっぱりきちんとはならないでしょ。ものすごくアバウトな感じの物語になる。でもそこが面白いんだよね。うまくいくと、時間的にも空間的にも信じられないような広がりを持ったものになる。

文 で、「ニヤヒヤ」はうまくいったのかしら。
ぼく 見てどうだった？
文 うーん、少なくとも信じられないような広がりを持ったものには見えなかった。
ぼく まずいなそれは……。

ここでお知らせ。時々自動は12月28日(月)午後7時から、吉祥寺のライヴハウスMANDARARA-IIでコンサートを行います。料金はドリンク込みで二千円。芝居はもちろん人形劇も紙芝居もあります。問い合わせは982・4413(時々自動)

ジョン・ゾーン・ゾーン 玖保キリコ



顔はこんなんである



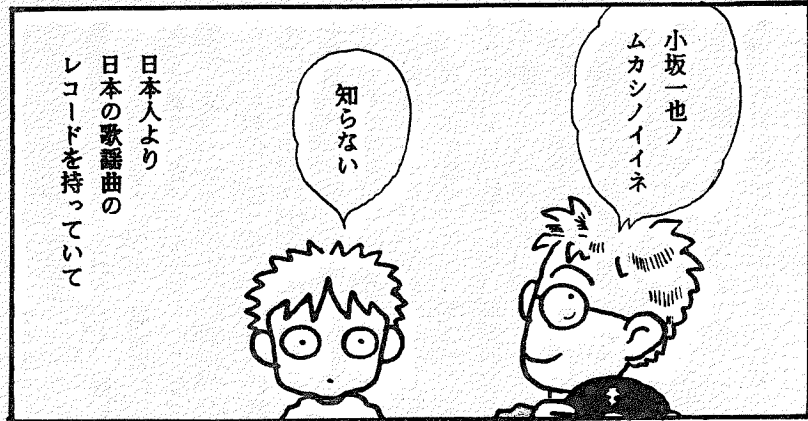
足元はこんなんである

☆の左右別々がポイント



映画が好きで
昔の日本映画の
ポスターを集めてて

コレ、
イイネ
バナナ姫



小坂一也ノ
ムカシノイイネ

知らない

日本人より
日本の歌謡曲の
レコードを持っていて



すぐ疲れて

遊びいご

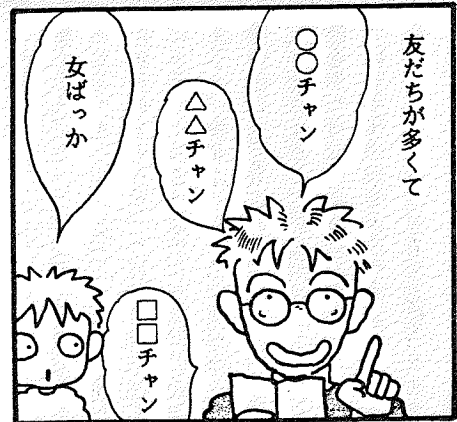
ツカレ
チャッタ...

カラダ
ヨワイカラ



辛いものが好き

ヒヤー
トリップスル



友だちが多くて

○○ちゃん

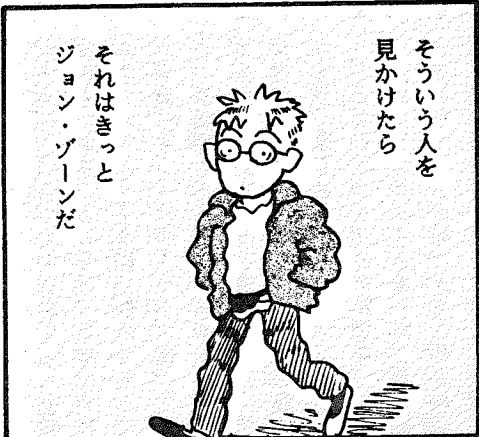
△△ちゃん

□□ちゃん

女ばっか

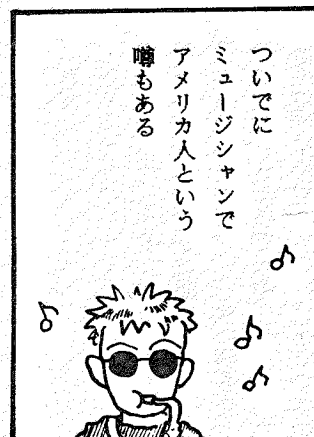


漫画も好き



そういう人を
見かけたら

それはきつと
ジョン・ゾーンだ



ついでに
ミュージシャンで
アメリカ人という
噂もある

最近の…… 西沢幸彦

小学校

我が家に小学校五年生の娘が居る。となりが学校なので1分前に出かけても間に合うという程近い。近いという利点はあるが、朝、目がさめないうちに、教室に着いてしまうだろうし、帰りに道草も食いにくいという欠点もある。27、28人、2クラス全員は友達で

りでも、刺身でも良し。残ったワタの部分は、必ずすみを取り、口の部分あたりで、足と切りはなす。足の部分を小さく切り、アルミ・ホイルに、ワタと一緒に包み、酒を少々振りかけ、オーブン・トースターで15分程、熱を加えれば出来上がり。イカの持っている塩気で充分なので、塩は加えない。必ず新鮮なスルメイカを使う、ということさえ守れば、どなたにも上手に出来ること、うけあい。おためしを。

笛

フルートは、現在の金属製（主に銀、金、プラチナ）になってからはそれほど時代がたっていない（以前は木製の）、ピッチが低く、昔の楽器は使いにくいので、弦楽器のように、古くても良い楽器というものが少ない。たとえあっても、音程に問題があったり機械的な部分に問題があったりする。

ある。我々の時代は50人、10クラス、もっとも、ベビー・ブームであったが……。今は子供も少なくなっている上に、その学校は代々木にある。一般の住宅がだんだんと、減ってきているのだろう。来年入学するのは30人位だという。あと何年かで廃校になるだろう。

住宅

代々木に越してきて10年になる。人数も5人になった。突然5人になったのなら、あっとおどろく、という感じがあるのだろうが、これが、だんだんにふえてくるので始末が悪い。人がふえると、物がふえてくる。気がつくとも物の中に人がうごめいているという状況が出来上がっている。タンスの角に頭をぶつけないように、下にころがっている子供の頭をふみつぶさないようにと、これで結構気も体も使うものである。

料理

勤め人ではないので、仕事のない時は家に居ることが多い。子守もするし料理もする。と言うと聞こえが良いが子供に遊んでもらって、食い物を作って遊んでいるだけである。したがって後片付けは絶対にしない。途中でなげだすのもたびたびである。しかし時間があれば、毎日でも料理をする。勿論買物もである。とりわけ、魚屋が大好きである。ハマチや鯛は例外であるが八百屋のキューリやトマトと違ってまだ、季節感もある。ヒラメやムツが出て来れば、ああ、冬。春はメバル、アジは夏がおいしい、スルメイカも良いなどと、案じめるのである。

ここでひとつ、イカの料理を。新鮮な、スルメイカを一杯。足と胴とをはなす。この時ワタをこわさぬこと。胴の部分は、皮をむいて、糸づく

ちょっと以前までの楽器は、その具合の悪い部分を少しずつ改良していった、出来上がったものである。改良はしていても、問題は残るものである。しかしコンピュータの進歩とともに、具合の悪い部分が一目瞭然、すべてわかかってしまう。あとは穴の大きさ、間隔を修正すれば、すべて、正確な音程で演奏することができ、音質のバラつきもなく、歌口（息を吹き込む穴）の大きさ、カットの仕方、音量を大きくすることさえも不可能ではない。しかし出来上がった、音程の良い、パランスの良い、大きな音の出る楽器で演奏してみても、何かもの足らない。機械的にはまったく問題はないのだが。ドゥビッシイの「牧神の午後への前奏曲」の冒頭の部分のフルートソロの第一音は、フルートで最も不安定な音から始まる。

上質の絹ごし豆腐をあつかう要領で、

ちょっと力が入れば、こわれてしまう。上手に口まで運んでくれば、最高の喉ごしを味わえるという、ドゥビッシイ先生も、えらい音から始めてくれたものだが、それがえも言われぬ雰囲気をかもしだすのである。しかし新しい楽器で吹くと、あまりにも安定しすぎている上に、妙に立派になってしまっている。このタイプの楽器は今や主流で、全管楽器に共通していることのようにだ。時代と共に音楽も少しずつ何かが変わって行く。

出し物

「水牛通信」に連載されている「不可」を読んだが、これがどのようなオペラになるのか、見当がつかない。独白はあるのか、歌は、何を吹けばよいのか……。まあ、いいか。学生時代に「可」と「不可」はたくさん練習してあるから。

宅配の美味 巻上公一

宅急便の普及のおかげで、この頃産地直送便が流行している。雑誌などに載った記事やカタログを頼りに、はがきで注文をだしたり、直接電話をしたりと、これがなかなか面白い。

怠け者の趣味であるから、とにかく美味しいものを食べることができるといふ一点が、興味をつなぎとめ、少しばかりの情熱を傾けるサヤになっていくのだろう。最初は、丸元淑生の本「いま家庭料理を取り戻すには」で紹介

はがきで貰い、「遠く熱海からありがとう。でんぶんが豊富で味噌汁に入るととろけるようです」と手書きで書いてあり、思わず、舌の奥のほうから涎が滲んできて、すぐに十キロ注文。バイクドポテトにして皮ごと食べる。それから、青森のりんご。これは半年間の契約をした。毎月四十個送ってくる。第一回目はスターキングもぎたてで身が、ぐっとひきしまっている。無農薬だから皮も遠慮なしに、齒から血を出しながら食べることができ

る。新潟から星野正夫さんがつくった味噌も取り寄せた。二年ものの赤味噌で塩がよくなじんで、濃くしすぎても塩辛くならない。豆の匂いがあるかのようならぬ味である。中に、ちょうど水牛通信ならぬ味噌通信のようなものが入っていて、星野さんが十二年前に味噌つくりをはじめた時のことや

されていたもやし研究会にはがきを出してカタログを送って貰う事から始まった。うすべらい注文書と料金表が送られ、それを見て、アルファルファ、キャベツ、ラディッシュの種と砂糖などが添加されていない100%のピーナツバターなどを購入した。

少年の頃、やり残した宿題があるかのように。或いは、買ひそびれたラジコン飛行機の通販カタログを眺めた時の思いのように、トラックを待つばかりのころは熱く、荷物のダンボールが到着すると、待ってましたとばかりに梱包を解いた。

また、もやし研究会では、ざるを使った栽培法を推奨しているため、ざる、簡易温室用のポリビニールなど、送付された物は、まるで理科の実験セットのようにあり、少年的ころを満足させるに十分なものだった。

しかし、やることは地味である。種

ずっと赤字だったことが載っている。

地元静岡からは、醤油を取り寄せた。電話をすると、むこうのおじさんである人物が、とてもいいねいに、慣れた様子もなく、購入方法を教えてくれた。

「高くついでてしまいますが、クロネコとかで送りますか」

「ええ、そうしてください」

「一応、郵便振込用紙を同封しますが使いきってからですから」

「はい」

「お口に合わなければいいですから」なにやら腰は低いが、随分と自信に満ちあふれた醤油屋であった。それも国産の無農薬大豆だけを使ってたっぷり時間をかけて醸造した人のみが、言える言葉なのだろう。

さて、こんな宅配便「こ」をはじめて、いちばん喜んだのは、母である。

を一昼夜水に浸し、翌日それをざるにあけて、朝晩、種をリンスする。そうすると、一日か二日で産毛のように生えてきて、四日もすれば、アルファルファやラディッシュを食べることができるようである。

もやしであるから食すには嫌いな向きもあるが、慣れれば、これは立派な野菜の刺身であり、活き造りなのである。新鮮で栄養も見事なバランスなのだそう。

ほくは、芽がミリ単位で生え始めた時、うれしさと生き物としての植物の奇妙さに全身が痒くなった。それでも少し伸びたら、すぐに試食をしたのだから、感覚よりも食欲という自分に驚くというか……。

こういう楽しみを知ったせいで、その後いろいろなものを取り寄せてみた。ひとつは北海道のじゃがいも。返事を

食費が部分的に助かるからである。主婦たるものスーパーにでも行けば、当然経済から考えて、安い商品に手がいくわけで、ほくのようにあなたも自然派のちょっと高めの買い物はしないだろう。

夕暮れの町並みに宅配のトラックが走っていく。近い将来、宅配の演劇も登場するかもしれない。その日に備えて、じっくり調べた宅配メニューで、栄養と健康を貯えておかねばならない。なにしろ、役者は体力である。

これからはじまる室内オペラ「不可」で、若い男の役で走り廻るのだから……。

だが、稽古場は東京。きっと、家にはなかなか帰れないだろう。そう思うと、家で待ち、水をあたえ、栽培する趣味を手に入れた事は、実に不幸な事と言わねばならない。

なんというか、その腹減りました。

私の公的生活 三宅榛名

某日 鎌田さんからまた、原稿催促の電話があった。遅くなってごめんね。
某日 今日も悠治と電話で小せり合っていたら夕方になった。

某日 津野海太郎さんから電話がかかった。「吉祥寺某所で××子さんと一緒に飲んでいます。出てきませんか」今夜はフルーティストが来ていて練習中です。終了したらもう遅く、ひどくつかれて、ちょっとだめとなっていました。残念ですが、みなさんによるしくと電話をしたら、えっ、他に人なんていませんよ、僕だけです、と言われた。さっきいた人はどこに蒸発したのだろうか。

某日 新宿シアター・モリエールで、《飛行船日誌》第一回目のコンサート。大半は自分の曲。86年と87年に書いたもの。ドラムスがロック、フュージョンの山木秀夫さん、フルートがミュンヘンから帰ったばかり、新婚早々の中

山早苗さん。雨が降っていたがお客がたくさん入ってよかった。

某日 山の中のホールでCDの録音をした。裏の《ニコニコ食堂》(仮名)で焼めしを注文し、サジで一口すくうと、ジャリッとした音がした。同じく、玉じゃくしいっぱいの味の素の中に鳥が浮かんでいるという親子丼を食べさせられ苦境に陥った人もいた。日本の前近代性からの懸念なる脱却としての味の素について考察した昼食。

注。このCD(ウエストサイド物語)は十一月末にコロンビアから発売される。前記中山早苗さんのデビュー・アルバム。手伝いは三宅榛名。

某日 ミキサーの進平さんと赤坂で会い、映画音楽の打ち合わせをした。映画は夢野久作原作、松本俊夫監督(下グラ・マグラ)。

某日 四月からNHK・FM番組のインタヴューをしている。むかし高校

で学校放送のアナウンサーなどしていたのだ。気の晴れる仕事。今日は中村富十郎さんにお会いし、ご推薦の映画音楽(荒野の決闘)を聴いた。歌舞伎役者をはじめて面前にし、歌舞伎役者とは、ダイナミックに元気なものだと思っただ。タイトルは《世界音楽めぐり》毎日曜の夜十時から。

某日 デイヴィッド・バーマンがニューヨークから日本に来て三ヶ月くらいいる。横浜にクリスチャン・ウォルフを聴きに行ったら会った。古い家の大きな部屋を借りたときいたので地図を見せたら、うちのすぐ先、その郵便局の角を曲がり、お寺の横に入った家だった。はるばる一緒に帰った。十円コピーの店、寿司屋、駅地下の食品マーケット街、がこの日のガイド・リスト。

バーマンは、コンピュータで作曲をしている人です。

某日 仕事でおそくなり、あわてて夕食の買物に行った。店じまいのはじまっているマーケットで、一切百五十円の平目の切身を四つ買おうとしたら、大きな六切全部、六百円でいいから持って行きなとお兄さんが袋にはうり込んだ。ほんと、もらいすぎたなあと思っただ。帰ったが、粉をまぶしてバター焼きにしたらすごくおいしくて、残した人はいなかった。

某日 武満徹さんに会いみんなで《西洋乞食》、失礼、《西洋銀座》でお酒を飲んだ。私はジンジャーエールでした。

この日悠治は「西洋乞食」を「ウエスターン・ベガー」と訳していたけれど、同席のノルウェーのナンバー・ワン作曲家おじさんは今ひとつ、判然としない顔付きをした。何かおかしいかね、ヨーロッパにいるベガーは、だいたいウエスターン・ベガーだがね。

某日 作曲家のデイヴィッド・D・Tがニューヨーク・フィルと一緒にやってくるという。

D・D・Tの作品はことによったらこの十数年、ひとつも聴いていないと気づいた。この人のように近い友だちであれ、誰であれ、同業者の新作はほとんど聴かないという仕事の仕方をしてきた何年間があった。

某日 義妹と映画《悪の華》を観た。みているあいだ中、ワクワク楽しかった。お茶を飲みながら今日はなかなかのあたりだったと言っていた。帰りつく頃には何を観たか忘れた。

某日 鎌田さんからまた催促の電話があった。

もう下書きは書けています、明日清書して五枚、耳をそろえておわたししますと自信をもって答えた。清書をしてみたら四枚半しかなかった。ごめんね鎌田さん。

逆光線旅日記 村松克己

黒色テントは、十、十一の二ヶ月、「逆光線玉葱」（どういう意味だ！）という芝居をもって、関西、中国、四国、九州の二十四都市、二十六ステーションの旅に出ました。「逆光線玉葱」はエンツェンスベルガーというドイツの詩人の書いた「タイタニック沈没」という詩集をもとに、佐藤信が台本を書いて演出した芝居です。これは、その旅日記。

11月1日。ムラマツさん徳島着。徳島大学医学部の学園祭で公演。ムラマツさんは、サトウさんと入れかわりで、毎日芝居を観てダメを出したり、はげましたりするため来ました。それとスイジ班、つまり食事を作るかかりでもあります。テントの旅は、すべての仕事を、参加しているすべての人間に平等に分担してやっていく。性別、年齢、国籍、すべて関係なし。とはいっても、個々の体力の差はどうしてもあるわけで、ムラマツさんは、軽い仕事のかかりになっている。スイジ班が軽い仕事だというのはありませんが、六時四十分、定刻十分おくれで開演。観客三百十名ほど。ほとんど若い学生。なかにぼつぼつと年配の男の客がいる。黒テントはこういう客がわりと多いのです。どういふ人たちなのでしょう。終演後、飯を食いながらの交流会で、その客の一人である、六十すぎの白髪

のおじさんは「たった一人の息子が赤軍派に入って、国際手配になっているのですが、まあこれは私とは何の関係もない、と思っています。で、私もこの年になってプレヒトを読みはじめました。今日は芝居のタイトルがなんとなく気になって来てしまいました。むずかしいけれどとても面白かったです」とあいさつしていました。

テントをばらして、すべての道具類をテントについで、作業終了。十二時三十分。宿舎に行く。学園祭関係者のマンションが今夜の宿舎。ムラマツさんは宿舎につくとすぐ貸し布団にもぐりこんで寝てしまふ。若い人たちは四時ごろまでオルグの人たちと酒を飲んで話しこんでいたようです。ムラマツさんの右となりで寝ているのは、今回の旅のメンバーのなかでは二番目に若いミョウチンさん。ちなみに一番若いのはフジサワさん、二十才。ムラマ

ツさんとは四半世紀以上の年齢差があります。左どなりはヨコタさん。もとギニア大使館秘書官。ちょっと年増。もちろん二人とも女性です。テントの旅はすべてご寝。どうだ、うらやましいだろ。

11月5、6日。大阪。十七年前の最初のテント公演で、大阪城公園内の、「教育ナントカの塔」に「革命のなかの革命のなかの革命！」なんてカゲキなスライドを写して以来お出入禁止だった大阪城公園が、どういふわけかかりられて、今回は「太陽の広場」という大きな広場で、おだやかに、めめごともなく、二日で二ステージの公演。イトカワさんという、最初の黒テント公演のときのオルグでカメラマンでもある人が久しぶりにあらわれて「久しぶりに観て感動しました。黒テントはぼくの青春だったんだと思います。芝居も十七年前とまったく変わっていま

せん。実にキゼンとしてみました」と目をうるませている。ムラマツさんは内心ギョッとした。キゼンとしている、というのはいい。しかし十七年前とまったく変わっていません、というのはどう考えたらいいものか。ちなみに、黒テントとその芝居を写した写真のなかでは、いまだに糸川さんの写真がいちばんいい、とムラマツさんは思っています。観客数、二回で三百四十。おい、ちょっと少ないぜ！

11月7、8日。京都。いろんな人が来る。ヤマモトゲンさんが来る、フィリピンからベタのソクシーが来る、マコトが来る、インドネシアのナントカという劇団のカントカという人が来る。千客万来。去っていく人もいる。二週間ほど我々に同行してスイジ班をやってくれた、カナダ系韓国人の若い女の子キム・キョンエイが日本をはなれていくために去る。日本語のまったくわ

からないキョンエイは、みんなのインチキ英語につきあいながら、毎日泥だらけになって黙々と働き、しかもユーモアを忘れず、みんなの飯をつくってくれました。ありがとう。小さなズツクのカバンをみんなでプレゼント。そのカバンをだきしめてキョンエイは泣いています。私のカナダの住所を書いてスイジ車のレイゾウコの扉にはっておきます。カナダに来たらたずねてください、といってキョンエイは去っていき。マコトがカーテンコールのあいさつでおそろしいことを言っていました。「もう頭がうすくなったり白くなった役者たちが七十をすぎて、テントの中をうろろろするような不気味な芝居をやりたい、それまで続けるつもりです」と。いいじゃないの、面白いじゃないの、やってみましょう。観客数、二回で四百九十。もうひといきだったね。

おなかの中の物語

柳沢三千代

もしものこと

もしもあなたがとなりのおばさんのおなかへはいったらどうしますか。ほねのぼってあそぶかしら。「そんなことはしないよ」っていう人はどうしますか。かんがえてごらんさい。

もしもおかあさんがあなたのおなかへはいったらあなたはどうしますか。「もうすぐ生まれるからいい」なんて

いってたらごまりますよ。

ほねの木はわな

ある日よっちゃんか女の人のおなかへははいってしまいました。その女の人の名前はミカていうんです。よっちゃんは「またあかちゃんにもどるのか」と思っていたんです。けれどもそうじゃありません。ただはいつてしまっただけです。中には木がありました。それは、ほねです。小人たちが走って来ました。すると……。

一人の小人が木によくふくをひっかけたすけようとしてしまいました。よっちゃんもひっかかってしまいました。はんにたいに小人たちにたすけられました。そして小人たちといっしょにあそびました。よっちゃんは、きつとたのしかったです。でもみなさんもしてみたいと思っておかあさんのおなかへむ

りにおさなかつたらつぎのお話を読みましょう。

広場の川ではたらく人①

小人たちにおしえられて、広場へ行きました。「広場ってなあに」って聞く人がいるわね。それはね。いの中なのよ。よっちゃんはびっくりしてしまいました。すぐそこに川があったからです。よっちゃんは、のどがかわいていたのでいそいで走って行きました。すると……。小人がとめました。どうしてかしら。それは、小人たちでは赤いちをのむのです。そして小人が「のどがかわいたんだね。それじゃあのみ水のあるところへつれて行ってあげよう」といってつれて来てくれました。

「さあこれのみなさい」よっちゃんはびっくりしてひっくりかえってしまいました。それはのみ水が赤かったからです。この本を読んでトマトジュス

をこぼしたりしなければつぎはアイスクリームのお話になるはずですよ。

広場の川ではたらく人②

よっちゃんは、しかたなく赤いちをのみました。ところがとってもおいしいのです。よっちゃんは「そこの水よりおいしいや」と思っていました。あじはつめたいアイスクリームのようなのです。みなさんものみたいでしょう。めめすとも。それはアイスクリームを買ってとかせばいいのですよ。ただししおをいれたコーヒーをのませるためにこないとよくそくすればおね。そしたらつぎのお話にすすめられるし、いま話したアイスクリームがめめすよ。

ゆびのうち、ホテル

よっちゃんはまだちをのんでいます。すると……。小人が大ぜいやつて来ま

した。それはね。今日はホテルのけんをうる日なんです。よっちゃんもならびました。うまいぐあいによっちゃんまでへやがあいていました。へやは5へやです。それはゆびだからです。もう5本はふつうのうちです。どのへやにも、どのうちにもおくにたらいがあります。それはおふろのかわりです。えっ「水がでない」ってあのおね。小人は水のないおふろにはいるのです。おかしいでしょう。やっばりおなかの中と、そとではちがいますね。よっちゃんは小人のボーイさんにおしえられておふろにはいりました。このあとよっちゃんはとうなつたかしりたいでしよう。お話しますとも。ただしまほうつかいになって本を上になげたりわたりがすわっているいすの上にあなながすわたりわたしたの手ぶくろをとったりはさみでかみのけをきつたりしなければつぎのお話を読んであげましょう。

よっちゃんにとってはつまらないよ。よっちゃんは、小人のボーイさんにききました。「ボーイさんおふろの水は」するとボーイさんは「……。きみは知らないのかね」「なにが」「水なんかいらぬのに」そのつぎのあさになりました。そしてまたボーイさんにききました。「レストランへつれて行ってくれない」「レストラン?」

「どうしたのボーイさん」「レストランなんかないよ」「じゃあアイスクリームやさんは」「ないよ」「じゃあブールは」「ないよ」「じゃあどうぶつえんは」「ないよ」「じゃあしよくぶつえんは」「ないよ」「つまらないよ」「あんなにおおきなところがあつたにどうしてなにもないのでしょうか。こんど小人のかいぎがあります。よっちゃんは行きました。そして手をあげました。そしてあたりました。よっちゃん

んはいました。「ホテルにプール、どうぶつえん、レストラン、アイスクリームやさん、しょくぶつえんを作っ
てほしいです」と思いっきりいまし
た。すると……。一人、二人、三人、
……。50人。なんと50人もさんせい
しました。手をあげていない人はたっ
た一人でした。そしてとうとう作りあ
げました。ゴミはどうなるかおしえて
ほしかったらいますぐ読んであげま
しょう。

ゴミはどうなるの？

外とおなかの中ではちがうのでゴミ
も外とおなかの中はちがうのです。で
すから、おなかの中のゴミは、いろい
ろな色の水なのです。けれどもわたし
たちがするようにポリバケツみたいな
ものに入れて下アのところにとめて
おくのです。ところで、そのゴミはど
こへいくのでしょうか。やっぱりゴミや

さんがもって行くのです。でもゴミや
さんはどこへもって行くのでしょうか？
きたない話ですけどゴミは、わたした
ちのおしっこやうんちになるのです。
よっちゃんはこのあいだゴミをすてて
いるところをみましたよ。さてもうゴ
ールにちかくなりましたよ。

もうすぐ子どもがうまれるよ

もうすぐたのしい日がきます。おい
わいのよういよっちゃんもてつだい
ました。たのしい日というのはだれか
がミカの子になるのです。それは男で
も女でもいけるのです。でもよっちゃん
はさんかしませんでした。それはな
ぜかって、よっちゃんには、ママもバ
バもいるんですもの。でもよっちゃん
は、おきやくさまとしてよばれました。
よっちゃんはケーキがたべられてとっ
てもたのしかったですよ。

さてだれがえらばれたでしょうかね。

それは、女の子でした。その子はもう、
うれしくてうれしくて、とびあがりま
した。よっちゃんにもだきつきました。
そしてつぎの日その女の子はみんなと
おわかれしてきしゃにのりました。そ
してきしゃはおなかの中からきえてい
きました。するととりのなきごえがき
こえてきました。みるとよっちゃんは
ベットの上にいました。それはゆめだ
ったのです。でも、ミカに子どもがで
きたことはほんとうでした。

あとがき

この話はうそだという人が多いです
ね。わたしもうそだうそだと思いなが
らかきました。でもこの話はほんとう
かもしれません。みなさんもほんとう
だと思ってくださいいつかほんとうに
なるかもしれないから。

(8才9才の頃の作)

もやしのとげ 吉原すみれ

近頃、好むと好まざるに関わらず、
だんだん母親に似てきたような気がし
ている。姿、形、声(電話でよく間違
えられる)はさることながら、なんと
性格がある。母親は元来、引っ込み
思案で堅真面目、努力家、バカ正直。
そういう私は怠惰、面倒臭がり屋、目
立つの大好き人間(あまり良いところ
ないなあ)と、ハチャメチャである。
ところが、3才の息子を叱っている時
にふと思ったのだが、どこかで聞いた
ようなセリフだと思ったら、かつて私
が母に叱られた時と同じセリフをくり
返しているではないか! そういった
事が度重なり、意外や意外、自分にも
バカ正直で、引っ込み思案(この私が
!)の部分が大いにあることに気づい
てしまったのである。少しずつ私も母
の路線に近づきつつあるのかと思うと、
うれしいような、物悲しいような複雑
な気分である。

母はモヤシの。ひげ、を丹念に取っ
てから料理する。一袋のモヤシに費や
す時間は約30分。昔は時間の無駄使い
とあざ笑っていた私も、なんと最近
はひげを取らなくては気色悪くてモヤシ
を食べられなくなった。もち論数段味
は良くなるが、まさかこんなことまで
似てくるなんて……。そして時には母
娘並んで座り、明朝食べるモヤシのひ
げをせっせと取っている今日この頃で
ある。

編集後記

「不可不可」のベッドシーンは、あのグレゴール・ザムザが、突然、身動きできなくなったのと違って、とてもエネルギッシュだ。それでも、どこか死の影が漂っている。

ベッドに横たわっていると、夜半、隣りの患者が、「アッ」と短い叫びをあげて息をひきとる。カフカの世界ではなく、目黒区の国立第二病院での現実の話である。おそらく、そこはきわめて非現実的な世界だったのであろう。死刑執行人や囚人や断食行者などが、部屋を出たり入ったりする。病院の食堂で待っていると高橋悠治は、編槓様のバジリマ姿ですがたをあらわしたのだった。今私は、前歯を二本欠いただ

けで、すっかり古いこんでしまい、暗い洞窟のようなひんまがった口から吐きだされる息を気にしている。たった二本だけなのだが、土手の前にならんでいた家が洪水で流出してしまっただうな荒涼感にはさからいようがない。

それにひきかえ、同室者が三人、死体となつてかつぎだされるのを目撃していた高橋悠治は、悠然と「不可不可」を書きあげ、役者を集めて芝居をつかった。三人と二本、それだけの違いでしかないが、歯医者はやはりカフカのなテーマにはなりえない。

断食行者のせつかくの労働も、ついには誰からも見向きもされなくなつて、彼は息をひきとる。死体は一刻れの糞束とともに片付けられる。拍手さえされなくなった存在についてカフカは書いている。私の「不可不可」への不満は日がな一日、ブランコの上で暮らす曲芸師が登場しないことである。本願寺

の講堂の上から、ブランコが長い影をひいているのを私は幻視しているのだが……。カフカの日記一九二二年六月六日。「体重もなく、骨もなく、肉体もなく、二時間、通りから通りを歩きながら、ぼくは午後、書いている時に告白したことを篤と考えてみる」

(鎌田慧)

水牛通信 第九巻第十二号 一九八七年十二月十日 定価二〇〇円 発行人 堀田正彦 発行所 水牛編集委員会 〒154 東京都世田谷区新町2-15-3 八巻方 電話〇三(四二五) 九六五八 振替口座 東京四一九一七九二 印刷所 鶴トライプリントショップ